

GS03-2 抗がん剤誘発末梢神経障害に及ぼすレニン・アンジオテンシン系阻害薬の影響

○内田 真美¹, 高取 真吾¹, 河添 仁², 森下 茉鈴³, 魚住 龍史⁴, 座間味 義人⁵, 石澤 啓介⁵, 川崎 博己¹, 難波 弘行¹, 田中 亮裕², 荒木 博陽²

¹松山大薬, ²愛媛大病院薬, ³岡山大薬, ⁴京都大院医, ⁵徳島大院薬

オキサリプラチン (L-OHP)、パクリタキセル (PTX) およびビンクリスチン (VCR) は、末梢神経障害を発症する代表的な抗がん剤である。我々は、動物実験においてレニン・アンジオテンシン系 (RAS) 阻害薬の長期投与が、フェノール誘発末梢神経障害を有意に改善することを報告している。そこで、上記の抗がん剤による末梢神経障害に対する RAS 阻害薬の予防・抑制効果について、ビックデータおよび電子カルテ情報を用いて解析した。

2010 年 10 月～2015 年 7 月に米国食品医薬品局 (FDA) が公開している FDA Adverse Event Reporting System (FAERS) に報告された L-OHP、PTX および VCR のいずれかの薬剤による治療を受けて、末梢神経障害が認められた患者を対象とした。さらに、2009 年 5 月～2016 年 12 月に愛媛大学医学部附属病院 (以下、愛大病院) において、L-OHP 含有レジメンを 1 コース以上行った患者を対象に、電子カルテを用いて後方視的に調査した。

FAERS データ解析の結果、RAS 阻害薬あり群は、なし群に比べて L-OHP、PTX および VCR 誘発末梢神経障害の有意な発現低下が認められた。一方、愛大病院のデータ解析では、RAS 阻害薬あり群およびなし群における L-OHP 誘発末梢神経障害の累積発症率は、それぞれ 36.9%および 91.7%であり (log-rank 検定: $P=0.067$)、RAS 阻害薬あり群における末梢神経障害発症までの L-OHP 累積投与量は、なし群と比べて有意な減少が認められた (ハザード比: 0.47、95%信頼区間: 0.19-0.99、 $P=0.048$)。